

糸乗 貞喜

(よかネットNO.17 1995.9)

- 1 観光・サービス産業

柳宗悦の文章にひかれて訪れた

私の小鹿田(おんだ)とのつきあいは、というより片思いのような関係は次の文を読んだときから始まった。

「峠を降りて村に入れば耳に聞こえてくるのは水車の響きである。焼物の土を砕くのである。音の間はいたく長い。大きな受け箱が少しの水を待っている。急ぐ用もないのである。待ちどおしく思うのは吾々の心だけと見える。だがこの緩かな音があってこの窯があるのである。もしせからしい機械が入って来たら、この村はたちまちつぶれるであろう。機械に職が奪われてしまうからである。狭い谿間は家の増えることすら防いでいる。早く機械が動いたなら生産の過剰に、たちまちものがはけなくなるであろう。この村とこの窯とには、待ちどおしい水車が一番仕事を助ける。」
(「日田の皿山」柳宗悦民藝紀行 岩波文庫版より)

これは昭和6年に書かれた文章である。この文章を読んで、「この風景は今どうなっているのだろう」という興味をもったことが、十余年前に私を小鹿田に運ばせたのである。

小鹿田のことを書こうとすると、その前に私のイヤで僻みっぽい性格について述べておかねば悪いような気がする。この「日田の皿山」は私の友人が、「糸乗さんが読んだらきっと喜ぶと思う」といって上製本の小冊子を和紙にくるんだまま貸してくれたのであるが、借りたままなかなか手が出せなかった。私は定説の定まった偉い人というと、何となく近づく気がしない。そして柳宗悦はそんな人ではないかと思っていた。しかし、私のために思いついて、大切にしている本を貸してくれた友に悪いと思って身近においていた。読むまで1年ぐらいかかったように思う。

根性がまがっている上に、確たる信念などというものを持ちあわせていない私のことであるから、

一読、柳宗悦に対する考え方が変わった。そして二十数巻の全集まで、買ってしまう羽目に陥っている。

小鹿田の話にもどる。十数年前の夏、博多から久大線で日田まで行き、1日に2~3往復しかないバスに乗って終点の小鹿田についた。川沿いの狭い道路を登ってきたバスから降りて、つい数メートル前を見たら、「水車」と柳宗悦がいった、土を砕く水受け型の唐臼があった。そして、「音の間はいたく長」かった。

昭和6年に柳宗悦が書いている風景がそのまま私の前に広がっていた。狭い谿間は家の増えることを、今に至るまで防いでいて、現在でも10戸の窯元しかない。

小鹿田焼は柳宗悦に発見され広く知られるようになった

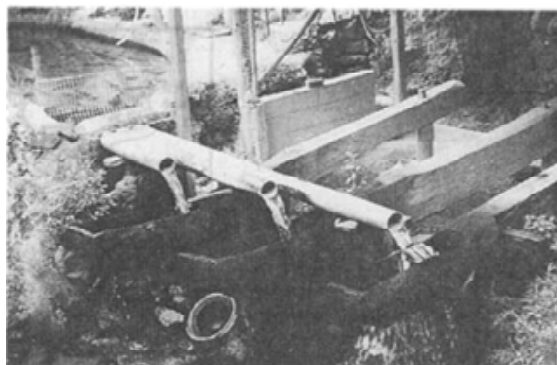
今から300年くらい前に、小石原の陶工が小鹿田へ技術をもたらしたと伝えられているが、今でも陶土は裏山に豊富にあるといわれており、その土を求めてこの地で窯をつくったのかもしれない。小鹿田の皿山には田や畑が一枚もあるようには見えない。ひょっとして山や谷をへだててどこかにあるのかもしれないが、少なくとも10戸の暮らしを支えてきたものは焼物だけだったと考えられる。

それが柳宗悦に発見され、バーナド・リーチが訪れて作陶したりしたので世界的にも知られるようになり、昭和45年には国の記録保存文化財の指定も受けている。柳宗悦はその発見の下りを前掲の「日田の皿山」で伝えている。

「四年ほど前に戻る。私はかつて久留米の一軒の陶器屋で不思議な品々を見つけた。それはどうして今出来のものとは思えない。それほど手法が古く、形が良く色が美しい。或ものは遠く唐宋の窯さへ想起させた。心を惹かれながらそれらの数々の物を柵から下ろした時、凡てが同じ一つの窯で焼かれているのを知った。そうしてその窯が日



小鹿田のまん中にある大型の登り窯。8室で構成されており、昔は全戸でこれを使って焼いていた。今では5戸の共同窯となっており、下から順繰りに使う室が上へ移っていく。



唐臼の水を受ける部分



唐臼の土を砕く部分

日田郡大鶴村に在ることを漏れ聞いたのである。それ以来その窯のことが心を離れなかった。……土地の人はそこを皿山と呼んでいる。この名は各地に窯を訪ねる人には既に親しまれている呼び名である。皿を造るところ、焼物の出来る場所、それを皿山と呼ぶ。朝鮮でよく沙里（さり）というに等しい。日田の皿山は大鶴村に属し、小字は小鹿田である。不思議にもこれを『おんだ』と読む。」

ここへ宗悦は昭和初年に、日田から四里（16 km）東で、あと二里半の山道を歩いて出かけている。現在、私が小鹿田へ行こうとすれば、福岡天神の事務所から車で2時間余で着く。おそらく、

宗悦が山道を歩いた時間より短い時間しかかからないのではないかと思う。これほどに世の中は変わっているが、小鹿田の中は余り変わっていない。

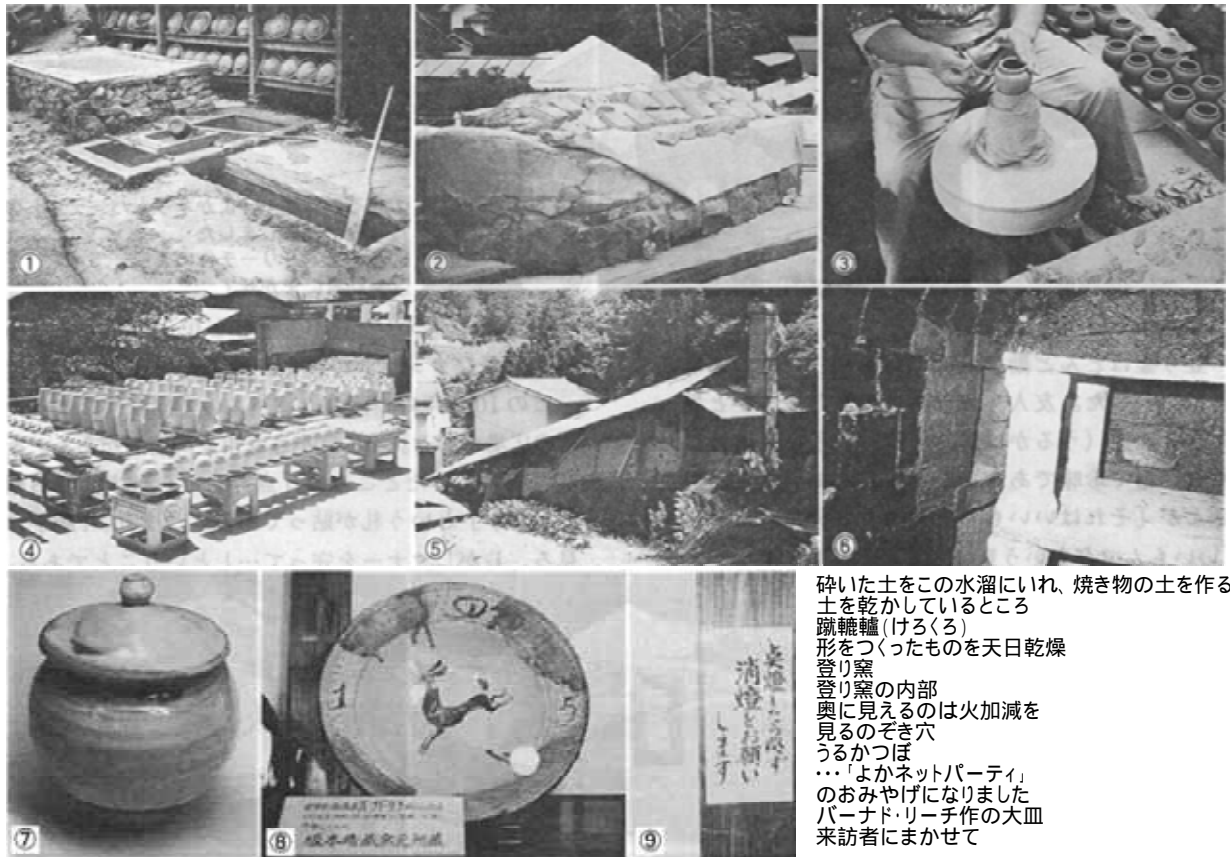
昔と変わらない焼物づくり

この小鹿田を紹介する文章は極めて書きにくい。先日、前の焼物組合長の坂本茂木さんにお会いしたとき、私が「ここへ来だしたきっかけは、柳宗悦の『日田の皿山』なんですよ。」といったところ、「以前水上勉が来て『あれは日本の三大随筆のひとつだ』と書いていましたよ」といわれた。

三大エッセイといわれるような文章が既にあり、今も里の風景も焼物づくりもそれほど変わっていないのだから、書きにくいのは当然であるかもしれない。どうか小鹿田焼の特徴などは柳宗悦の文章を参考にさせていただきたい。私は、知っている人にとっては分かりきっていることだと思うが、今でもこんな焼きものづくりをやっているのかと思われるような、平凡な工程を説明する。

- ・土…宗悦が「裏山から取ってくる。沢山ある赤土である」といっており、今でも沢山ある。
- ・唐臼…水受け型の唐臼で土を砕く。一度入れた土は2週間搗く。この里に来ると唐臼の杵の音がしている。どこにいてもこの音の木霊から逃れることはできない。12月31日の夜から正月1日だけ休んで、2日から唐臼（全自動天然エネルギー土破き機）は稼働し始める。これは10戸それぞれに備えている。
- ・土づくり…砕いた土を水溜にいれ泥とし、それを金網で漉してコロイド状に水中に浮かし、その泥水を溜めて水抜きして土をつくる。これを轆轤にのるくらいの柔らかさにするために、窯の上に乗せたりして乾かす。
- ・蹴轆轤…焼物の形をつくる。
- ・天日乾燥…雨がバラつくと、どの家も全員が庭に干している焼く前の器を家に入れるために、慌てて走り回る。

—小農田焼窯の由来—
 小農田焼(別称血山焼)は、寛永2年(1705年)に小石原村の御嶽三右衛門が技法を大磯村の黒木十兵衛が「養生」と、小農田の仙樂、現亭家が「土焼」を提唱して開窯したのが始まり。
 香鯛系の焼き物に主な手法に、彫り込み、12ヶ目などがある。昭和26年、御聖焼(東屋草子)、27年御聖草子、バード・リーチ系が香山に作り広くなり、昭和45年、国の無形文化財指定を受けた。



砕いた土をこの水溜にいれ、焼き物の土を作る
 土を乾かしているところ
 蹴轆轤(けるくる)
 形をつくったものを天日乾燥
 登り窯
 登り窯の内部
 奥に見えるのは火加減を
 見るのぞき穴
 うるかつぽ
 …「よかネットパーティ」
 のみやげになりました
 バーナド・リーチ作の大皿
 来訪者にまかせて

- ・素焼・・・ここでは、あまりしない。小さいものはするが、大きい焼きものは一度に釉薬をつけて焼き上げる。
- ・登り窯・・・もとは共同の大きい窯を全戸で使っていた。10戸の家が8室の窯を順繰りに(公平を期するため、上下の室を移り変わっていく)

使っていたのだが、今ではその窯は5戸で使っており、他の家は自家用を持っている。理由は「焼きものは重い仕事だが、焼く前はまだ重くて運ぶのがかなわんのですよ」ということであつた。

- ・サイクル・・・時間のサイクルのひとつは2週間

である。「なぜ2週間なのか」ときいたら「10日では十分じゃない」というような返事もらった。何か深遠な理由でもあるのかと思って再度聞いたら、「いえ、十分砕かれていないと泥が浮いてこないの、土がとれないんですよ」という平々凡々なる返事。余りに分かりやすく、またまた感心した。宗悦は月に2度も火を入れるので「日々多忙」と書いているが、今では窯がふえている（各戸で持っている）ので、夏をよく乾く時だと（天日乾燥）月に1回冬では2ヶ月に1回ぐらい火を入れる。

テストピース

登り釜はほとんど勘で焼いているが、一度こんなことに会った。友人への土産にでもしようかと思つてうるか壺（うるかはアユの腑や、子を塩漬けにした食べ物で珍味である）を手にとっていたら、おばさんが「それはいいもんですよ」といわれた。小生「何でいいもんなんですか」、「奥で焼いたものですか」、「奥でってどういう意味ですか」というようなやりとりから話を聞くことができた。

登り釜は最初に下から焚いて、ある程度熱が上がったら一番下の窯室を横から追い焚きし、焼いたら次の上に...というように焚いていく。この焼け具合は、勘で見当をつけることが多いが、各室ごとに覗き窓がついていて、その窓の近くにうるかつぼを置き、焼き具合を見るテストピースの代用に使っていたのである。

「いいもんですよ。奥で焼いたから」ということは、テストピースの位置ではなく、“焼き温度の高いところで焼いたもの”という意味であった。もちろん買って帰った（蓋までついた壺で、1個300円である）。

小鹿田焼の特徴

日常生活で使う雑器である。茶碗、湯呑み、鉢、手塩皿、大皿、徳利、カメなどあらゆる焼物とい

っていいくらいである。釉薬も化学薬品は使わない、セイジ（緑）、アメ、クロが主体となり、「刷毛目」、「櫛目」、「飛びカンナ」の模様がついている。

この10余戸の集落の上にバスの方向転換をするための広場がある。そこに小さな市立陶芸館がある。そこの中に入ったところに「点灯したら必ず消灯お願いします」という札が貼ってある。つまり、「勝手に見ろ、しかしマナーを守って...」ということである。この陶芸館の中には、小鹿田焼の伝統を伺える逸品が置いてある。もちろんすべてガラスケースの中に入っているのだが、バーナド・リーチの鹿の絵皿もある。

この里は時間がゆったりと流れている。